

the spirit of the times

建設の時代

第 14 代理事長 吉田 光男

水戸の街にだんだん本格的なビルが建ち、美しい建物がふえてゆく。目抜き通りの商店街にもいい建物が出来始めた。

今までの店舗が終戦後に建てられた仮りの宿とするなら、今後建てられるものは或る程度の永続をねがった恒久的なものということになる。敗戦時の廃虚の焼トタンから、本格的なビルの建設にいたるまで、ひとまず、二十数年の蓄積を要したわけである。

われらの世代で、住宅や店舗の一つや二つ建てたことのない人はまず稀れであろう。とにかくわれらの前には焼土以外の何物もなかった。建築についての伝統もなく、一切を無からはじめねばならなかった。建てては毀し、更に建て直しては毀ししてやっとここまできたのである。

とにかく水戸の街は、今後の十年間に相継ぐ建築によって、一つの決定的な貌を持つことは確実である。昭和 30 年代が最も強力な経済成長の時代として記憶されるなら、40 年代は街の相貌を決定した「建築の時代」として後世に記憶されることになるろう。

ヴェネチアの運河で、つばの広い帽子をかぶったゴンドラの船頭が、ゆったりと櫂をあやつりながら得意気に説明する。

「あれは 13 世紀からずっと人の住んでいる家。これも 13 世紀につくられたリアルト橋。あれはマルコポーロの住んだ家」

ぼくらは苔むした中世がそこに連綿として続いているのを気味悪く感じ、ただ啞然として眺めるだけである。東西交易の接点としての都市国家繁栄の幾世紀かが、たしかにそうした街を生み、その分には彼等はそれを誇ってもいいが逆にその後の続く幾世紀かの間、彼等はそれに付け加えるべき何物も持たなかったことを恥じねばならぬ筈である。

こうした事情はヨーロッパのいたるところで感じられる。ルイ 14 世からナポレオンに至るパリ・マリア・テレジアのウィーン・ルネッサンスのフィレンツェ等々。かれ等は過去の繁栄の幾世紀かの遺産に縋って生きているかのように見える。そして世界歴史の脚光を浴びた数世紀以外は付け加えるべきろくなものを持たなかったというべきである。

われらの街はそうした過去の栄光をもたぬ。なにもかもこれからなのだ。われらはすべてを自分の手で造り出してゆくしかない。伝統はない。だからわれらの建設してゆくものがすべて伝統となるのだ。なんにもないところから、幾らかでも堅固なものをめざして作

り出してゆく「建設の世代」に居合わせたのが、われらの宿命である。われらを脅かす過去の亡霊もないかわりに、また規矩もないようなところでひたすら建設につとめなければならぬのがわれらの宿命である。

古代ポーランドの或る地方で、人は一生の間に必ず一個の井戸を掘らねばならぬという。一個の井戸は、その人がこの世に生きた証しであり、必死になって残した痕跡であるという。われらもまた一個の井戸を掘らねばならない。そしてこの世になにがしかの痕跡を残さねばならない。時代もまたそのことを求めているのであろう。

たとえば水戸城の再建などという形で、そうした建設が行われることを私は好まぬ。せつかく眠っている亡霊を無理してたたき起きなくてもいいのだ。本物よりよく出来っこはなし、ここらで貧乏たらしい遺物を観光のタネにしようなどというケチな考えをきれいさっぱり捨てた方がいい。

われらの世代にはわれらの世代のモニュマンがあっていいのだ。過去から解放されのびやかで頑丈でたのしいモニュマンである。その意味で森林公園などは実にいい企画だと思う。明るい樹木の茂りあう涼しげな樹陰を贈れば後世からきっと感謝されるだろう。こうした建設にはいくらかでも手を貸したいと思う。

われらの建設がいささかでも美しいものでありたいと希うのは、われらのささやかな虚栄である。